テーマ保育における教育効果の検証 —預かり保育の実践から—

富田久枝
(東京福祉大学)

1. はじめに

本研究の目的は、アフタースクール(預かり保育)における保育内容としてテーマ保育を取り入れ、その教育効果を検討し、さらに今後の預かり保育における保育内容を模索しようと考えた。

ベネッセチャイルドケアセンター友泉は、地域の子育て支援を目的として、K幼稚園の敷地の一部に乳幼児施設(0歳から3歳)を並存し、乳幼児(0歳から3歳)の保育を行う一方で、幼稚園に就園している幼児(3歳から6歳)の幼稚園終了後の保育(預かり保育)を幼稚園の保育室の一部を使用して実施している。これが、ここでご紹介するアフタースクール(預かり保育)である。このアフタースクールの利用者は乳幼児施設出身でK幼稚園に就園している子どもがほとんどであるが、他の幼稚園に就園して利用している子どももいる。年齢は3から6歳の子どもが対象で、子どもによっては週5日利用する子どももいれば、週1日の子どももいるため、曜日によって利用人数も年齢構成もばらばらで、結果的に縦割り保育が必然になっているのが現状である。そのために、カリキュラムの編成が非常に難しく、子どもによって経験の差が出てしまったり、興味が持てないうちに保育者がやらせてしまったり、と問題点が多かった。そこで、従来の週案や月案では補いきれない保育内容を思いきって見なおし、テーマ保育を取り入れることになった。

2. テーマ保育とは

新しい保育内容としてテーマ保育を取り入れるにあたり、その保育コンセプトを「創造」と「共生」とし、個々が十分に充実しさらには友達と共に育ちあうことが大切であるとした。テーマは文化、歴史、自然といった分野から抽出し(地球、人間、トラベル、風と水など)、そのテーマを1ヶ月から3ヶ月かけて取り組んでいくというものである。さらにその保育の発展を捉える指標として創造性の発達ステップ(IN, ABOUT, CREATE, OUTPUT, EVALUATION)を目安にその変化を保育者が評価しながら、子どもの遊びを援助していくという方法をとった。テーマ保育のカリキュラムは、このステップにそって子ども達が取り組むであろう姿や必要になると予測される教材、遊具、教具、環境すべてについて、テーマ保育開始前にテーマ案を立て、毎日の子ども

もの変化に合わせて書き換えていくというものであった。このテーマ保育で最も大切にしていたことは、個々の成長・発達、興味・関心に合わせ、個々の保育目標を立て、子どもが動き出すまでは保育者は待つ・見守るというスタンスをとり、あくまでも保育者は支援者として援助することに努めたことである。

3. 検証の方法

このテーマ保育の教育効果を検証するために下記のようなアセスメントを使った。

- ①ビデオによる録画(毎日)
- ②子どものつぶやき収集(毎日)
- ③発達測定(KIDSスケール使用)
 - 各テーマ開始時(ベースライン測定)
 - 各テーマ終了時(効果測定)
- ④友人関係測定(保育者による評定)
 - 測定の時期は発達測定に同じ

4. 結果と考察

①つぶやきの変化からみた効果

日々記録していったつぶやきを時系列で個々にまとめその変化の特徴を検討した。その主な特徴として、「…してもいいですか?」と新しい教材など提示するとすぐに尋ねてからでないと使えない子どもが多かったが、この保育を始めてから「…します」「…したい!」といった言葉の数が増えるようになった。また、新しいものをみると、自分からかかわろうとしなかった子どもが多かったが、この保育をすすめるうちに、ほとんどの子どもが「なんだろう?」「どうして?」「調べて見よう!」「…は〇〇だからじゃない?」といった探求心や洞察力が育っていることを示唆する言葉も増えていた。また、友達との関わりでも、「〇〇ちゃんってすごいね」「いっしょにやろっか!」「ほく手伝うよ」など自分から友達を援助したり、協力しようとする言葉の数も増えていた。これは、テーマ保育が子どもの日々のつぶやきをもとに日々カリキュラムを書き換え、子どもが自分達で遊びを進めるまで待つ、見守るといった、子ども主導型の保育方法であったためと思われる。ここで増えていった言葉は、自分達で決めることができるとうわかった子ども達が本来の自分達の力を発揮しはじめたことを示唆する言葉であると考えられる。

②友人関係評定からみた効果

友人関係評定は保育者からみて、その子どもの友人との親密度を5段階で評定しその得点の変化から友人関係の広がりやその親密度を測ろうというものである。ここでは2事例を紹介する。この事例はテーマ開始から終了までの3ヶ月の変化についてである。

【K君の場合】表1参照

K(男児)はこのテーマ保育を始める前は女兒のMやI、Yとはほとんど関わる事が無かった。Kは活発であるが、自分の思いが先行すると周りへの状況判断ができなくなり、トラブルが絶えず、女兒から敬遠されたり、限られた子どもとしか遊べない傾向があった。ところが、この保育を始めてから、Kは自分の興味を持ったことを集中して遊ぶようになり、乱暴な面が少なくなっていった。また同じテーマを他の男児と共有することで、その男児たちが橋渡しとなり、女兒との話題が共有できるようになっていった。テーマ終了後は殆どの子ども達との関係が向上していた。

【Aさんの場合】表2参照

A(女兒)は、一人っ子で友人関係がなかなか上手いかず、少しでも友人関係を広げたいという母親の要望でアフタースクールに入園してきた。入園と同時にテーマ保育が始まったため、戸惑う姿も多く見られた。しかし、数名の女兒とは、後をついていく形ではあるが遊べるようになっていった。しかし、男児とは全く交流が持てなかった。テーマ終了近くになってやっと男児とも遊び、自分から好きな遊びを見つけて遊ぶ姿も見られるようになった。Aの場合もKに比べれば得点は低いが満遍なくどの得点も上昇している点から十分に友達と関われるようになったと考えることができると思う。

③発達測定にからみた効果

発達測定に本研究ではKIDSスケールを使用した。スケールの評定者は保育者である。発達測定に関しては現在データ処理中なので、当日ご報告したい。

5.まとめ

保育における規制緩和が進む中で預かり保育を取り入れる保育現場が急増している。しかし、その保育内容はいまだ預かる程度のものに留まっている現状もある。しかし、子どもの生活全てが重要な時間と考えれば、預かり保育の時間をどのように子どもが過ごすことが望ましいのかを考え、環境を保育者は整備する必要がある。このアフタースクールでの取り組みは長年預かり保育をする中で起こった問題解決のために、テーマ保育という全く新しい保育方法を取り入れたが、預かり保育だからじっくりゆっくり同じテーマ活動に取り組め

たのかもしれない。しかし、このテーマ保育の効果を見ると、普通の保育にも、小学校の総合的な学習にも応用できる可能性があると考えられる。

友達との関係評定変化(1)

表1 K.Oからみた友人関係変化

K.Oくん	実施前		実施後	
	名前	得点	名前	得点
	T.Aくん	4	T.Aくん	5
	K.Sくん	4	K.Sくん	5
	R.Mさん	3	R.Mさん	4
	M.Yさん	1	M.Yさん	4
	S.Iさん	5	S.Iさん	5
	A.Mさん	3	A.Mさん	3
	M.Iさん	1	M.Iさん	4
	R.Hさん	5	R.Hさん	5
	A.Uさん	4	A.Uさん	4
	T.Tくん	2	T.Tくん	5
	K.Kくん	5	K.Kくん	4
	Yさん	1	Yさん	4

友達との関係評定変化(2)

表2 A.Uからみた友人関係変化

A.Uさん	実施前		実施後	
	名前	得点	名前	得点
	T.Aくん	1	T.Aくん	2
	K.Sくん	1	K.Sくん	3
	R.Mさん	3	R.Mさん	4
	M.Yさん	3	M.Yさん	4
	S.Iさん	1	S.Iさん	4
	A.Mさん	1	A.Mさん	4
	M.Iさん	1	M.Iさん	3
	R.Hさん	4	R.Hさん	4
	A.Uさん	3	A.Uさん	4
	T.Tくん	3	T.Tくん	4
	K.Kくん	1	K.Kくん	2
	Yさん	1	Yさん	4